

氏 名 (本 籍)	森 田 啓 (茨 城 県)
学 位 の 種 類	博 士 (体育科学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 2213 号
学位授与年月日	平成 11 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	体育科学研究科
学 位 論 文 題 目	スポーツ倫理の機序とスポーツ世界の方向性 ～環境倫理思想を基礎に～
主 査	筑波大学教授 博士 (体育科学) 高 橋 健 夫
副 査	筑波大学教授 阿 部 生 雄
副 査	筑波大学助教授 博士 (体育科学) 近 藤 良 享
副 査	筑波大学講師 教育学博士 清 水 論
副 査	筑波大学教授 博士 (教育学) 大 高 泉

論 文 の 内 容 の 要 旨

1. 論文の構成

森田啓氏提出の「スポーツ倫理の機序とスポーツ世界の方向性：環境倫理思想を基礎に」という題目の論文は、序章、第 1 章、第 2 章、第 3 章、第 4 章、第 5 章、結章からなっている。400 字原稿用紙換算 504 枚相当のものである。

2. 論文の内容

本研究の目的は、薬物ドーピング問題を研究の手掛かりにして、スポーツ倫理の機序を確定し、スポーツ世界の方向性を明示することである。

序章は、先行研究の分析から課題を設定し、本研究の方法を確定した。

第 1 章「倫理的立場の確定」では、本研究における倫理的立場を措定した。代表的な人間本質である「社会的存在」と「差異化・卓越化する存在」を根拠にして、本研究では「倫理」を社会秩序の調整技術とし、生活世界の秩序維持の手段捉えた。それはあらゆる生活世界に慣習倫理として存在しつつ、反省倫理による変容可能性を有すると把握した。そのため、慣習倫理と反省倫理の弁証法的関係を前提にするとしても、まず慣習倫理の基準を評価しなければならない。

第 2 章「自由主義の成立過程と現状分析、および共同体論からの批判」では、生活世界における「善と正」の優先関係の解明を課題とし、スポーツ世界の基礎をなす自由主義社会の倫理について現状分析した。その結果、当初、自由主義社会は「共和主義的精神」を前提とした「近代自我」を基点にしたが、時代の推移と共に、自由主義社会の前提であった「共和主義的精神」を亡失した。そして現在に至っては、その当然の帰結として、各自は「負荷なき自我」としてアトム的に存在し、価値基準を経済（市場）に委ね、個人の欲望を無条件に解放するに至ったと評価した。この評価に基づいて、1980 年代の政治哲学上のリベラリズムの最大の論敵であるコミュニタリアニズムについて検討した。コミュニタリアニズムは、歴史的に形成されてきた共同体の伝統や慣行の中でのみ、個人は道徳的存在および政治的行為主体としての使命をまっとうできるとする。本研究では、現在のリベラリズムが過度の自己決定権に傾倒し過ぎている点、および現状のアトム化状況に起因する各種悪弊を憂慮する

コミュニタリアニズムの主張を支持し、生活世界における「正よりも善を優先」する立場を導出した。

第3章「環境倫理の基本思想」では、コミュニタリアニズムの延長線上に「環境倫理思想」を位置付け、生活世界における「存在と当為」問題、および環境倫理思想に基づく新しい責任概念の検討を課題とした。コミュニタリアンの主張する共通善を直裁することは困難であるが、本研究では環境倫理を考慮した「共和主義的精神」を暫定的共通善として措定した。なぜなら、人間の存続という最低条件を保障するには環境倫理思想が不可欠と判断できるからである。環境倫理思想は、環境を保存・保全しようとする意図から、当然、人々の行為原則に規制を及ぼす。そのため、批判の対象とされる「近代的自我」に代替する視座を提供すると考えられる。また、本研究はハンス・ヨナスの理論に依拠し、現在の時代状況を科学技術の発達に伴う地球環境の危機と捉えた。そこで、まず人間の存続を第一義とし、「当為に対する存在の優位」を主張した。つまり生活世界における人間存在を最優先した上での当為の導出が重要と判断した。さらにヨナスは、従来の「互惠的」「同時代的」「直接的」「個人的」な責任概念に代わり、「一方的責任」「世代間倫理」「遠隔倫理」「集团的責任」といった新しい責任概念を提示したが、本研究もこれらの責任概念を支持し、人類の生存を保障する考え方として、これからの生活世界のあるべき倫理観であると評価した。従来のスポーツ倫理では、生活世界の人類の危機的状況という視点は完全に抜け落ちている。この点を視野に入れることによって、スポーツ世界の行為原則は必然的に影響を受けると考えられる。

第4章「スポーツ世界の事実判断」では、スポーツ世界の現状分析を行った。スポーツ世界は、生活世界の中から人々の差異化によって「意味の限定された領域」として、切り取られた特殊世界の一つであり、それは結社の自由が認められた自由主義社会において成立可能であると捉えられた。近代オリンピック成立以降のスポーツ世界の倫理の変遷を辿ると、その成立当初は、社交の精神、フェアプレイの精神といったスポーツ世界独自の倫理が存在した。しかし、スポーツが大衆化するにつれて独自の倫理観・価値観は変容した。スポーツ世界では特に1960年代頃から興行化、商業化に迎合し、1970年代にはアマチュアリズムが撤廃され、1984年のロサンゼルス・オリンピックでは大会運営自体が民営化され、商業主義化が定着している。こうしたスポーツ世界の潮流は、生活世界の変化と軌を一にしており、スポーツ世界は生活世界の縮図、あるいは前者は後者の反映となっている。以上のことから、現在では生活世界、スポーツ世界ともに無条件の私益化を肯定していると結論づけた。

第5章「スポーツ倫理の機序とスポーツ世界の方向性」では、これまでの現状分析に基づき、本研究の最後の課題であるスポーツ倫理の機序とスポーツ世界の方向性について考察した。まず問われるべきは生活世界とスポーツ世界の関係である。前章までの生活世界とスポーツ世界の事実関係を踏まえれば、生活世界の価値観の変化は、そのままスポーツ世界の価値観形成に連動していた。「存在と当為」の観点からのスポーツ世界、生活世界、環境世界の三者関係は、スポーツ世界は生活世界を存立基盤とし、さらに生活世界は環境世界を存立基盤にする包摂的依存構造を構成している。よって、スポーツ世界の存在及び秩序維持には、論理的に生活世界における存在の確保が前提となる。以上のことから、スポーツ倫理の機序は、スポーツ世界の秩序を維持する以上に、生活世界の秩序維持が肝要となる。一方、「善と正」の関係という観点からみれば、本研究では生活世界においては「正に対して善」を優先し、共通善の回復を主張したが、スポーツ世界の「善と正」の優先関係については留保していた。しかし、スポーツ世界は生活世界を成立基盤としている以上、生活世界の安定度がスポーツ世界の存続を左右する。生活世界の安定には、共和主義的精神、共通善が不可欠と考え、本研究では、スポーツ世界の方向性として、生活世界における共通善の回復を支援するためにも、スポーツ世界の共通善を形成あるいは復活すべきであると提案した。

本研究の結論を導出する際に、ヨナス理論に依拠し、「当為に対する存在の優先」および従来の責任概念に代わる「集团的、一方的、世代間的、遠隔責任」という新しい責任概念を支持した。近代的自我を基礎とするリベラリズムは、権利主体である各個人の自由な行動が社会を進歩させると考えてきた。しかし、ヨナスも主張しているように、現代社会においては、負荷なき自由によって、結果的に、進歩よりも破壊に加担している点を自

覚しなければならない。進歩思想は生活世界の基盤である環境世界を破壊しつつある。人間の存続を希求する限り、進歩思想から循環思想への転換は不可欠である。持続可能な社会を実現するためには、私たちの「世界観」を変換しなければならない。なぜなら、各自の「権利」が主張できるのは人類の存続が前提だからである。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、これまでのスポーツ世界に新たな視点を開くものといえる。ともすれば、各自の「権利」意識が全面に出されている現状に懐疑を唱え、これまでの視点とは異なる「環境倫理思想」に着目し、その視点からスポーツ世界を方向付けようとしたものである。これまでのスポーツ世界は、その存在が自明と見なされ、未来永劫まで持続できるとの幻想に立っていた。人類の最重要課題である環境問題にスポーツ世界はどのような貢献が可能であるかを模索する過程で、「存在と当為」「善と正」の優先の価値序列の確定を試みている。この難解な問題に対して、各種文献を渉猟し、論理的に結論を導き出した点は高く評価できる。今後は、様々に分派する環境倫理思想を緻密に分析し、スポーツ世界への適用可能性を追求することが期待される。

よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。